

刊夕七廿月五

常警日新聞

定額一圓五角
 廣告料五號十二字第一行五五字
 日曜、祭日の日休刊
 發行所 常警日新聞社
 印刷所 常警日新聞社

三身は即一なり

眞繼 雲山

中尊たる一佛の左右には脇士といふが侍立したまふ脇士とは御脇立または挾侍とも申し、本尊の佛徳を表現し、その用務を辨じたまふ侍者の謂ひである。

釋迦如来には二通りの脇士がある、大乘にあつては文珠、普賢の二菩薩。小乗にあつては迦葉、阿難の二羅漢と定められてある。

藥師如来には日光、月光或ひは藥王、藥上の二菩薩不動明王にあつては制吒迦、毘羯羅の二童子。傳大士には普賢、普成の二童子また般若菩薩には梵天、帝釋といふことになつてある

阿彌陀如来には觀音、勢至の二菩薩、脇士として立たせ給ふこと世の知る通りであるも、これは淨土宗の表式であつて、眞宗は一向專念を宗風とするゆゑ、阿彌陀佛の外には更に脇士を祀らぬ制規である。御傳鈔にはその謂はれを説き明かして『彼の二大士觀音、勢至のこと』重願たゞ一佛名を專念するにたれり。いまの行者あやまりて脇士にかふることもなけれ、直ちに本佛を仰ぐべし』とある。つまり阿彌陀佛のみを念ずることが取りもなほさず

釋尊や觀世音の御眞意に叶ふ所以であるとするのである。日蓮宗にいたりては釋迦牟尼佛をひたすら本佛と仰ぐ。その点では眞宗の阿彌陀佛におけるにひとしいであらう。

さて斯く列示してくると然らば釋尊と阿彌陀佛と乃至本佛とは如何に相違するかといふ話になるが、左様に澤山の佛様が群雄的に割居してゐられるわけではなく、一つの本體を法報應の三身佛に區分して仰いだのである。即ち法身たる本佛が衆生救済の方便に報はれて私たちの精神界に示現して下されたのが報身佛としての阿彌陀佛であり、更に衆生の機根に應同して吾々の見聞覺知にも納得できるやうに地上にその肉身を御示し下されたのが應身佛としての釋尊である。形あるものは必ずこれわれずにはおかぬこと、鐵則とするゆゑ

ノート

餘りはしやいて高聲はいけないが内密話のやうなことは座を白けさせるので大禁物。
 地上の釋尊は滅度を示されたが、その御本體は形なきゆゑ永久不滅である。われも絶対の永生を求むる

とせば形なきところに命を見つけねばならぬ。
 本身法界を本筋として説いた悟りの法門が華嚴經であり、阿彌陀佛を中心として説かれたものが淨土三部經であり、地上出現の釋尊の本體は、久遠常住の本佛(法身佛)そのものであると

二明日の献立二
 【朝】みそ汁—そら豆—根いも
 【晝】焼肴—鯛おきは焼き
 【晚】にしめ—竹輪—里芋—椎たけ

して一切衆生に常住不滅の法身佛たる覺位を示されたものが法華經壽量品である華嚴經入法界品には、有名な善財童子が五十三の善智識を求めて南國を遍歴したといふ物語りが記されてゐるが事實は釋尊御自身の御修行時代の心地の道程が示されてゐる。

その善財童子が日數ほど経て補陀洛迦山に登ると西向巖谷の中流に滾々たる泉地あり、樹林鬱蒼の下、香草軟の上に端座したまふ觀世音菩薩を禮拜し、大悲の法門を受けたとある。斯やうに長時の修行を経て悟りを開き佛となり給ふたのが釋尊である。佛とは固定的の存在でな

く、門閥の垣根を高くして餘今の入門を許さぬといふ如き窮乏なものではない。悟つたものが佛である。但し慈悲を施すといふことが悟りの本體本質であるゆゑ

單に自分が悟つただけのものを佛とは言はず、自らも悟り他をも悟らしめてその悟りを圓滿完全に實行するものを佛とは申すのである

是非御利用を

営業時間午後九時迄
 平町四丁目河岸通り
三井質店
 電話六〇六番

咽喉專門

平町田町七〇番地
山内醫院
 醫學士 山内亨吉
 電話六九一

貸切の●●●

御用命は!!!
 獅子吼(四四九)ノ勢デ
 マツサキ
 眞先ニ……………(マツサキ)
 ミラニニタクシーへ!!!

中村齒科醫院

平町鍛冶町七



町議員候補者 川崎文治君

原籍 平町字長橋町三五
 住所 同上
 生年 明治廿八年十一月廿五日
 學歴 平津高等小學校高等科卒業 中央商業學校卒業 中央大學經濟科中途 國語傳習所修了
 職業 常警毎日新聞社々長 常警毎日印刷株式會社々長
 賞賜 ナシ

推薦狀

拜啓 時下新緑の候貴臺益々御清榮の段奉慶賀候陳者今回町會議員候補者として川崎文治君を最適任者と認め必勝を期して擁立致し候に就いては何卒同君が最大多數の榮冠を擔つて當選相叶候様絶大の御援助賜り度く此段伏して奉懇願候 敬具
 昭和八年五月

平町第一區(長橋) 推薦者有志

川角兼吉外一同

御挨拶

町會議員候補者 川崎文治
 是非なく押されて出馬致しましたが願ひますれば淺學非才甚だ其の器に足らざるを遺憾とする點多く汗顔の至りに耐えませぬ。而し一度立候補を決意致しました以上、自分の所信を町政の上に披瀝して『住みよい平町、明るい郷土』たらしめ度い願望が胸中に滿ち溢れて居ります。どうぞ私を勝たせて下さい私は郷土平町の爲めに根限り働く覺悟と決心を持つて居ります。私は貴下の町政に對する御意見を取次ぐ忠實な公僕である考ひを忘れませぬ必らず御期待に添ふ熱意を有して居ります。財政難の平町が今後爲すべき多くの都市計劃を持つて居る事を懐ふ時、老軀を提げて晝夜の別なく健闘して居られる青沼町長の誠意誠心に感激し、自分の不敏をも願はず立候補を決心しました。どうぞ私が町會に一箇の議席を占めて働く事の出来る様絶大なる御援助を衷心より御願ひ致して止みませぬ。先づは立候補の御挨拶を申し上げ、貴下の御聲援を切望致します。
 昭和八年五月

皇軍の武威を輝かした けふ海軍記念日

平町各學校の記念行事

平町各中等學校及び各小學にては本日皇國の興廢を一舉に決し敵艦隊を日本海に撃沈して皇軍の武威を廣く海外に發揚した日本海大海戰の記念日に當るので非常時に於ける此の日を意義あらしめるべく講演會後左の如く各種の催し物をなし若人の意氣を示した

△警中

午前十一時校内前スタート
平窪村御殿山往復一萬米マ
ラソン舉行

- 1(三十八分五十六秒)五ノ一鈴木五平2三ノ三鈴木計3五ノ四金成宣4三ノ三猪狩正雄5五ノ四蛭田禮三6三ノ四松崎莊枝7五ノ三庄司省吾8五ノ二虫木正三9五ノ五會川寅次郎10四ノ四山口研次11四ノ五平岡清滋12三ノ二佐藤利夫13二ノ五平山靜14一ノ二新妻と男15三ノ三新妻利夫

△平商

午前八時半校庭スタート神谷村駐在所往復一萬米マラソン舉行

佐正治7三ノ甲小林正男
8五年塚越時男9同三部幹夫10同柚木秀雄11三ノ甲高橋義雄12五年小山喜一郎13一ノ甲松本和郎14四ノ甲木村春義15五年佐々木道典

△警女 講演會
△佑賢
午前八時より辯論會開催終つて記念撮影

1(徳器の修養)二年吉田淺松2(奮て!!青少年)二年高田英市3(終始一貫)二年鶴沼忠昌4(磯馴松)一年川上正義5(神州日本の大使用)二年小野善彌6(若人の就職難)二年

沿岸各漁船に 急速改善の要

飛塚試験場長の談

本縣の鮪漁業は八九年前までは七十艘の漁船を數へ關東北では最も隆盛を極めたものであるが漸次衰微し現在では僅か十八隻の漁船が動いてゐるに止まり遠洋漁業に參りな状態を示してゐる即ち無電發信設備あるもの僅か二隻に過ぎず今に

遠洋漁業であるから縣當局が此の點に留意し本縣漁業振興の爲資金融通の道を講ずべきである宮城縣が進出して來たのは十萬二十萬圓と云ふ多額の金を融資してゐる爲で現在ではどんな小漁村でも百噸級の大型漁船のない處は殆んどなく本縣も大いに見習ふべきである

廿三夜堂新築

けふ盛大な上棟式

平町十五丁目の廿三夜堂は豫てより工費二千餘圓を以つて本堂の新築中であつたが此の程大體の工事が出來上つたので本日午前十時より盛大な上棟式を舉行した

大谷納税合併

平町三丁目大谷長屋納税組合及び平信用納税兩組合では今回合併して大谷納税組合と改稱したが管理者は大谷久藏氏である

四倉兒童競走

石城郡四倉町小學校では本日の海軍記念日を卜して全校生徒が四倉平町鎌田橋間の驛傳競争を行つた

郡産馬議員

其の後の當選者

昨報石城郡産馬組合總代會議員選舉第一區の當選者は既記の如くであるが二區三坂水戸三區上下小川四區川前方面の當選者は左の如くである

- (二區)三坂志賀良助 澤渡阿部直衛 永戸藁谷佐太郎 箕輪高萩正一(三

區)上小川草銀寅伊 國井金吾(四區)川前矢内安藏 新妻文次郎

平町人事

回出生

△材木町二九 當時仙臺市杉山通一三 鈴木義達氏長女雅子

△一丁目一四 鈴木重藏氏長男芳重

△田町三 野崎喜八郎氏五男晴智

回死亡

△鍛冶町 當時東京市荒川区尾久町三丁目 吉田芳治(五ツ)

一冊の代金

御希望通りな

五冊の雑誌

自由に讀める

川崎文庫

電話六三〇番

申込次第(規則書進呈)

看護婦急派

の求めに應

じます

平町南町

平看護婦會

電話三〇七番

來る三十日執行せらるべき町會議員選舉に際し磐陽野球界の恩人吉田金作氏には舊城跡、八幡小路兩區民の熱誠なる推薦により遂鹿戰場に出馬決意致され候

御承知の如く同氏は三十餘年我海運界に身を置き日本郵船會社の名船長として東西兩半球の貿易港に足を印せざるなき國際人たるのみならず殊に歐洲大戰當時はコンヤ丸船長として獨乙エムデン號の慘禍におびゆる歐洲航路に幾度の航行を重ね何等禍も無きを得たる剛膽の人士に御座候

今や功なり名遂げ悠々故山に自適する境涯にありながら郷土愛に燃ゆる同氏が磐陽野球界向上の爲に貢獻せる功績は吾等フアン一同の感激する所に御座候如斯大陸的な氣宇と眞摯なる信念を持つ純情の郷土人こそは町會の淨化を計る最適任者と信じ推挙するものに候日進歩進展の途上に在る平町政刷新の爲め又磐陽野球界向上の爲めにも實に重大なる意義を有する事なれば御賢察被成下大多數を以つて當選の榮冠を得せしめらるゝ様御援助賜り度懇望する次第に御座候

昭和八年五月 敬具

磐陽野球後援會有志

- 阿部政右衛門 新田目春松 柴田友次郎 石川友次郎 井坂久吉 熊坂謙次郎 高木忠三郎 外幹事 一三郎 責任者 福島縣平町長橋町七 高木忠三郎



旭硝子株式會社製品

板ガラス

- 赤菱印
- 硝子壺
- 硝子食器
- 其他各種

松崎硝子製作所

平町新川町(電話一四二番) 仙臺市榮町(電話五九七番)

刺す正味僅かに一日

決死の各候補

投票は賣る可らず買ふ勿れ

市場投票の内輪話

刺すところ正味二日に迫つた平町會選舉は必死の三七候補が所謂手段を撰ばざる底の運動方法を餘儀なくされてゐるが今回の選舉に現はれた特異性は市民がはるかに選舉運動より超越して候補者の吹く笛に踊らぬことだ「非常時」といふ意識が頭にコペリついてゐる結果かも知れないが一面からいへば市民の頭が進んで来た一證左ではなからうか市民はすでに自分の選ぶべき候補者を決定し金や情實では一寸動かぬといふもの固さが著しく目立つて来たそれ故にどの候補者から投票の依頼を受けても「宜しうござんす」の一點張りてれを眞に受けて皮算をやつてゐる候補者の方がよつぽと滑稽に見えて仕方がない

ある候補者は買収感について次の如く語つてゐる

買収をやつた選舉と全然やらない場合とを比較して見ると買収した方がよつぽと安心してゐられる何故つて兎に角二百なり三百なりを買つて置けば少くとも五割乃至六割位の確票は己惚れなしに計算出来るし買収しない場合は自分の一票以外の札は仕方がない然しながら買収によつて當選した場合「買ったもの」との觀念が全然脱け切れず一面また當選後買つた連中から色んなことを頼まれても親身になつて盡してやらうなんて云ふ考は毛頭起きて來ない隨つて前回買収した連中を再び獲得することも一寸困難で

永久的にすると云ふ譯には行かなくなると云ふにあり投票は買ふ可らざるものであり賣るものでない

イワシ尙豊漁

相場は一箱六七十錢

賑ふ濱の昨今

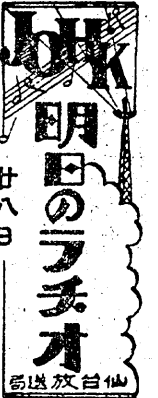
石城郡小名濱江名各海岸では鯉節の漁期に際して是が餌とする鰯の漁獲は本月初旬以來不漁続きであつたが三四日前から俄然豊漁となり最近の小名濱沖合では一日七萬貫餘の大漁を見江名豊間等でも非常な活況を呈

醫者に行く筈の

酌婦、情夫と駈落

内郷村に潜伏か?

双葉郡浪江町西方町飲食店金澤屋事大和田春治方酌婦加藤マサ(三)は去る廿五日午後十時頃腹痛を裝ひ醫師に行くとして同家を飛び出した儘前借九十圓餘を踏



明日のラジオ

今晚の部

後六、〇〇 子供の時間
お話「海軍記念日」海軍大佐武富邦茂
後六、二五 ことばの講座
「ことばの正しい読み方話し方」(四)神保格
後七、三〇 海軍協會主
「催海軍記念日の夕實況」日比谷公會堂より中継
(挨拶)海軍協會東京府支部長東京府知事香取昌康

明日の部

前九、一〇 榮養料理献立「辨當(二十)里芋とガンモドキの木の芽和へ」榮養研究所
前九、三〇 子供の時間
「自殺者の心理診断」東北帝大醫學部教授醫學博士丸井清奏
前一一、〇〇 園基講座(第一講)七段瀬越憲作
後一、五〇 満洲より
常磐津「初戀千種の濡草」
後一、二〇 新人の午後
浄瑠璃櫻井志江外
後一、四〇 野球試合實況
東京大學野球聯盟リーグ戦(早稲田對慶應)明治神宮

護岸工事

湯本湯川の

石城郡湯本町では同町大字關船地内を流れる湯川が年々出水毎に堤防潰潰氾濫するので八年度災害復舊工事として工費四千五百七十八圓延長五百米をコンクリート護岸にする事となり來月初旬より着工する豫定である

産米復た下落

前途尙ほ悲觀の兆

石城販賣利用組合大浦農業倉庫の共同販賣は去る廿五日行はれ二百七十俵を入札に付せる結果四等建値八圓十七錢を以つて平町の青木要次郎氏に落札されたが前回に比較すると一俵に付九錢の安値を見た

磐中生負傷

けふ競走の奇禍
(別項)磐城中學校にては本

主人の金を

拐帶逃走

平署行衛を捜査

木村科醫院

平町五丁目橋際
電話九〇三番

飯 野 匡 救 工 事

三千圓の割當で
石城郡飯野村では過般發表された八年度匡救事業費の

宮外苑球場より中継
後一、四〇 新内「鬼怒川物語」浄瑠璃黒羽幸一郎
後二、〇〇 長唄「秋の色」種「唱」恩田路久子
後二、二〇 義太夫「夕霧阿波の鳴渡」浄瑠璃島田春子
後二、四五 歌澤 垣栗原徳寶外
後三、〇〇 新内「釜淵双級巴」浄瑠璃板倉ふさ外
後三、二〇 聲色吹き寄せ
吉田一
後六、〇〇 子供の時間
唱歌 宮城縣第二高等女學校三年生
後六、二五 講演
後七、三〇 舞臺劇 敷島
後八、一〇 浪花節 敷島
後八、五〇 二重唱 ナザアロ 北澤榮

幕末剣士

【禁轉載上演及映畫】

第三百四十九號

悟道軒圓玉演
近藤紫雲畫
上田馬之助

蛇を恐れぬ盲人共

織田伊勢守の家來佐藤大學、青山庄司、前田勘之助の三人は上田馬之助と緒方新三郎の前へ来て、一献頂戴いたすと吸物碗に酒を注いで飲む、揃ひも揃つて三人共酒癖が宜しくない、上田に緒方は飛んだ悪魔に出會つたと思つたが吐り付ければ相手は泥酔漢とて無法な事をするであらう、さすれば他の客の迷惑にもなるは柳に風とあしらひ置くが宜しからうと

馬「拙者も頂戴いたす」
大「遠慮せずに飲め〜」
と云つたは、此の三人の中でもつとも酒癖の宜しくない佐藤大學、自分の懐中を痛めて呑む酒に遠慮する者はあるまい、上田は苦笑をして

馬「大きに酩酊いたした我々共は邸が遠方故此にて納盆といたして立戻るのであらう、各々は悠々これにてお遊びなさい、さあ緒方引き揚げよう」
と云つた時に佐藤大學大「まあ待つてくれ、今暫らく相手をいたせ、邸が遠いと申しても此の御府内であらう、さすれば五里十里

と離れた所ではあるまい、まづもう一つ過せ、一体貴公等の主人は何者だ旗本かそれとも小身大名か」
馬「我々は細川能登守の家臣でござる」
大「細川能登守、そんな大



名は聞いた事がないぞ、細川家は肥後熊本の本城主五十餘萬石を領する大諸侯、果代越中守と申されるが細川能登守とは熊本の細川の出店か」
馬「左様、分家にござる邸は本所中ノ郷」
大「ウーム、齋細川か、ヒエ

トロ〜と鳴く齋細川か殿様は能登守か鼻紙の様な大名だな」
馬「只今申した如く邸は本所とて茲より遠方でござるから御免を蒙る」
大「さて〜、これまでも云ふに、相手をしろ、今暫く〜に居れ、邸の門の閉まるは表向は暮六ツだが其實は四ツ迄通行が出来、これから品川に遊びに參る一緒に行きなさいそんな所へは參れぬと俺と同行いたすは好まぬとあらば割前を出せ」
これを聞くと新三郎はム

ツとした
新「最前より酒が云はせる事と存じて無禮なことを申すとも心には掛けぬが、あまりと云へば無法な事のみ申し居る、失禮千萬我々を何だと思ふ」
大「怒つたな此奴、面白いさあ抜け相手をしてやる」

一刀を引き寄せると上田馬之助が
馬「何をなさる、御同様に酩酊いたし居る故何を申すとも心にかけるな、時に新三郎貴公は先に戻るが宜い、イヤ此場は拙者に任せて置いて引き揚げなさい貴公が茲に居ては大事を生ずる」
新「しかし手前が引き取つたならば貴殿一人で此の泥酔漢の傳をいたさねばなるまい」
馬「まづ〜拙者に任して早く引き揚るが宜い、後のことは心配しなさいな」
これだけを小聲で申して馬「さて各々主人の邸は暮れ六ツになると門を堅く閉し外出いたした者は其れより以後は邸内に入れぬ事になつて居る、洵にやかましい家風でな、我々共も遊びに出ればとて氣に少しもゆるみがない、依つて此の連れだけ先に戻すことにいたしました、何卒悪からず」
大「さうではその小僧だけを返してやれ、さあさ小僧早く戻れ」
新「小僧とは何だ」
馬「コレ何を申す、貴公も酒は悪いな早々引き取んなさい」

と云つたは此の新三郎は先殿のお胤、これに怪俄をさしては一大事とそれで先へ戻す、新三郎は上田一人を置いて歸るは心残りの事であるが、急ぎ立てられてそれではと邸を指して歸る後には上田馬之助盃洗を取つて、其の水を窓からあけ

馬「これで頂戴いたす」
大「偉いな、イヤ貴公は豪傑だ、どうだ青山、前田此の人物は盃洗にて酒を引き受けるとは面白いな、これこそ我々の相手になる、コレ〜女、酒を持つて參れ」
女中も驚いた、ことわる譯にもならずよんどころなく酒を持つて來ました

御用命 印刷物の總代理
常警日印刷株式會社
電話三六〇番

市原醫院
平町田町
電話一一四番

外科 X 光線科
性病科
外科科
安齊外科醫院
平町田町
電話四七五番
意隨院入

夏の學生服
野も山も新緑です……
輕快な霜降洋服が澤山揃ひました
どうぞ御用意下さい。
小學生用……¥.40、
同(特製品)……¥1.20、
中學生用……¥2.05、
ふかや洋服店 平電 203

吉田眼科病院
平町星町、電話六八番

鹽にうらか 魚問屋
店代理平命生本日大最優最
榮 (盛) 賀 志
(三一電) 目丁四平